

テーマ：〈近代化の社会心理学〉

## 移動の人生・故郷の力/日本の戦後を等身大に生きる

戦後日本は地方から人びとを労働力として吸引して成長を続けた。東北地方、とくに青森県や岩手県は、集団就職、出稼ぎ、そして人口流出と、送り出しの代表地域である。故郷を離れた人びとにも、残った人びとにもそれぞれの人生がある。その多様さを近代化への「誇りある」対応として論じる。話題提供者として調査対象者の方々も登壇する。

企画/ 作道信介 (弘前大学)  
司会/ 辻本昌弘 (東北大学)

無料

シンポジスト (発表順)

- 1 「団塊の世代の人生経歴を辿って：戦後史とこれから」  
細江達郎 (岩手県立大学)  
話題提供者/脇江忠廣 (むつ市)、田中輝夫 (神奈川県)
- 2 「〈ホールド〉としての出稼ぎ：故郷をつくり人を留め置く力」  
作道信介 (弘前大学)
- 3 「限界集落をめぐる世代・家族・ふるさと」  
山下祐介 (弘前大学)

# 平成21年度 第53回日本社会心理学会 公開シンポジウム

日時/ 平成21年7月18日(土) 13:30~16:00

場所/ 盛岡駅西口アイーナ・803会議室

(JR盛岡駅から徒歩4分) <http://www.aiina.jp/>

お問い合わせ

作道 信介 実行委員会  
(弘前大学人文学部社会心理学研究室)

〒036-8560  
青森県弘前市文京町1

TEL 0172-39-3218

E-mail [sakumici@cc.hirosaki-u.ac.jp](mailto:sakumici@cc.hirosaki-u.ac.jp)

アクセス



# 平成21年度 第53回日本社会心理学会 公開シンポジウム

テーマ：〈近代化の社会心理学〉

## 移動の人生・故郷の力/日本の戦後を等身大に生きる

### 企画主旨

人生が移動であるとすれば、故郷とは移動がこしらえた実存のフィクションだ。私たちは移動の斥力と故郷の引力のなかで、自らの生活の場を作り上げてきた。戦中、戦後復興、高度経済、低成長、大不況…近代化の諸力のなかで、私たちは自らの生活の場をどのように作り上げてきたのか。出稼ぎ、集団就職、流出、過疎、高齢化、限界集落…その可能性。東北地方の事例を3人のシンポジストと2人の当事者が報告する。

司会/辻本昌弘（東北大学・准教授・社会心理学）

### 1. 「団塊の世代の人生経歴を辿って：戦後史とこれから」

細江達郎（岩手県立大学・教授・社会心理学）/ 脇江忠廣氏、田中輝夫氏（話題提供者）

昭和22—24年生まれのいわゆる団塊の世代は、日本の戦後の復興と経済成長を担ってきた世代である。この世代は現在、還暦を迎えた。報告者は青森県の下北半島出身者の人生の軌跡を中学時代以来辿ってきた。この軌跡は日本の多くの農山漁村が同様な歩みでもある。今回、この調査の対象者・協力者である二人に参加していただき、当事者による人生の語りにも耳をかたむける。大不況といわれる現在の状況と対比して、多くの再発見があらう。

### 2. 「〈ホールド〉としての出稼ぎ：故郷をつくり人を留め置く力」

作道信介（弘前大学・教授・社会心理学）

1974年以来、青森県は出稼ぎ者数日本一の“出稼ぎ王国”である。出稼ぎ者数は減少したが、依然として出稼ぎは人びとの生活を支えるベースラインである。出稼ぎは「食えないから、行く」という“出稼ぎ=必要悪”言説で理解されてきた。しかし、人口動態からは、大正末・昭和一桁世代が戦後復興期から出稼ぎに出ることで、人口流出が防がれた、という「ホールド」仮説が浮上する。報告では出稼ぎを人びとが近代化への対応とみる立場から、事例を紹介する。

### 3. 「限界集落をめぐる世代・家族・ふるさと」

山下祐介（弘前大学・准教授・地域社会学）

1970年代の社会減から1990年代の自然減をへて、2010年代は集落の限界・消滅が取りざたされている。過疎高齢化に関しては、他の周縁県と比べて遅れて進行した青森県だが、それでも徐々にふるさとの消滅が問題視されるようになってきた。報告では、青森県のいくつかの集落を事例に、他県とも比較しながら、集落の限界下の問題について読み解いていく。さらにはそこから見える今後の再生可能性について言及してみたい。

